

新 国 策 [海外事情]

ソ連の中国研究機関としては、歴史と伝説を誇り、今日でもかなりリベラルな、アカデミックな立場を貫こうとしている東洋学研究所と、これとは対照的に、現代の諸問題を中心に党・政府の立場にかなり忠実な極東研究所とが、従来は二つの大きな存在であった。そのほかにも、世界経済と国際関係研究所とか、国際労働運動研究所、あるいはアメリカ・カナダ研究所などにも何人かの中国研究者が活動しているが、右の社会科学学術情報研究所は、第三の新しい研究機関として創立されたもので、五年間の草創期を経て一昨年、モスクワ大学に近い郊外の一角に超近代的なビルを新設して移転した。ここには何百人という数のスタッフが働いており、ソ連における社会科学諸分野

世界一の規模誇る学術情報研究所

私はさる二月、ソ連科学アカデミーの招待で二週間ほどソ連に滞在、同国の中国研究者と交流してきた。今回私を招いてくれたのは、科学アカデミーの社会科学学術情報研究所というところだが、同研究所は一九六九年にモスクワに設立された、科学アカデミーの数多くの研究所の一つである。一九七〇年、たまたまモスクワ大学で開かれた国際歴史学会に出席した際、同研究所の中国研究者の人々と接触する機会があって、そのあたりから私は、ソ連にこういう新しい研究機関が生まれたことを承知していたわけだが、昨年モスクワを訪れたとき、同研究所の初代所長で、現在は科学アカデミーのもう一つの中国研究機関である東洋学研究所の中国部長である、デリューシン氏から、科学アカデミーとして正式に私を招待したい旨の話があり、それが今回、こういう形で実現したわけである。



ソ連から見た中国

- ▽ソ連における中国研究の現状
- ▽中ソ和解はあり得るか？
- ▽ソ連にとつての台湾・韓国
- ▽「走資派批判」の行方

中 嶋 嶺 雄

(東京外語大助教授)

の総合図書館をも兼ねている。情報ファイル、論文ダイジェストなどもきわめて系統的に整備されつつあり、社会科学の学術情報センターとしてはおそらく世界一の規模を誇るものだろう。

進む本格的な中国研究

そこでの研究活動の内容をみると、今日のソ連では、現代中国研究が社会科学の中の一分野というよりは、政治学、哲学、経済学、国際関係論等々の学問分野を貫く、いわゆるインター・ディシプリナリー(学際的)な共通項として、クロースアップされてきている状況を背景に、やはり同研究所でもこれが大きな課題であるようだ。そして、ここではとくに、副所長で中国研究者のクザジャソ氏(所長は経済学者で科学アカデミー準会員のピノグラードフ氏)が重要な役割を担っている。

因みに、さる二月、ソ連で「恐怖の壁」といわれる反中国映画が作られ、テレビ放映されたということが日本の新聞でも紹介されたが、実はこ

〈四月一五日号目次〉

ソ連から見た中国……………中嶋嶺雄…3
— 中ソ和解はあり得るか? —

春季号 合理的配分方法(下)……………佐々木力…13
〈これからの賃金曲線のあり方〉

〈海外論調〉
誰がソ連農業失敗の責任を負うか……………17
〈海外短信〉 ソ連の新聞と庶民感覚……………18

アジア情報……………19
〔会 報〕……………20
【資料紹介】 七五年の日中貿易……………21

れを作ったのもこの研究所で、各場面の解説にあつたのはクザジャン氏だという。

同研究所では、政府の要請もあることは事実だろうが、同時に、ソ連にとつて現代中国研究がいよいよ本格的な課題になっているだけに、単なるプロパガンダ的な中国研究だけではダメだという意識があつて、相当広範囲に資料などを収集している。たとえば新刊室を眺めると、私の著書などもかなりよく揃っていた。

また、ここでは中国だけではなく、日本もかなり大きなテーマなのだが、雑誌室に案内されて入ってみると、一人の女性が「エコノミスト」と「東洋経済」を広げて、日本の景気動向に関するペー지를熱心に読んでいる。どうするかと聞くと、そのエッセンスを要約し、すべてロシア語にして、情報ファイルの中に入れていくという。そして、そういうものを集めたクォーターリーの雑誌ができており、「日本」という項目のファイルや、それらをまとめて作ったクォーターリー誌には、日本の景気動向から政治の動向といったものまでがかなり緻密に収められていた。

あるいはまた別の机では、もう一人の女性が中国語の雑誌を懸命に読んでいる。ふと見ると、台湾から出ている「中共研究」なのだ。これらの女性性は、研究者というよりは一種のアナリストなのだが、そういうスタッフを多勢かかえてやっているわけだ。中国に関するものは、これまた当然「中国」という項目の一つのダイジェストになり、科学アカデミーの各研究機関に配布されるという。

こういったわけで、今日ソ連では、深刻な中ソ対立を背景にした国家的要請があることは疑いないが、そうであればこそ、いっそう本格的な中国研究が進められているわけである。

ある研究所に行き、望まれて講演したあと、研究者たちと交流していると、そのうちの一人が「自己紹介のために……」といつて一冊のロシア語の本をくれた。見ると、「経済調整期における中国労働者階級」という題名である。ソ連ではこういう本が出てくるのだ。日本では、現代中国を研究する人は多い一方で実は少ない。一九六〇年代前半の、文化大革命の前の経済調整期——いま批判されている鄧小平や劉少奇がいわゆる実権を握っていた時期の中国の労働運動とか労働者階級に

ついて、本が一冊出るかというと、とても出ないわけだが、ソ連ではそういう完全な分業体制ができてくるから、それだけで一冊の本が出るという状況である。

党の政治主義に冷淡な学者たち

もう一つ、そういったソ連の中国研究は、現在の党・政府のお先捧を担ぐだけのような、政治的プロパガンダに墮しているかという点、必ずしもそうではないということを強調しておかなければならない。むしろ、ソ連の研究者の中には、依然としてステレオタイプの教義をふり回す者、ソ連の政策がすべて正しいといわんばかりの政治主義的な論調に終始する者も少なくはない。しかし、全般的にソ連の中国研究がきわめて水準の高い成果を蓄積しつつあること、そして、そういった業績を産み出しつつある学者の中には、真摯な学問的態度で問題をリアルに考えようとする人々がかなり多いことも事実である。

たとえば、最近邦訳も出たピョートル・ウラジミロフの「中国特別区」(邦題「延安日記」)という本について見てみよう。これは、かつてタス通信の記者、実際にはコミンテルンの密使として延安にいたウラジミロフが、毛沢東や江青夫人、あるいは周恩来、康生などの活動を含めて、当時の中国の様子を綿密に綴ったもので、いわば中国革命史再検討の線に沿って出されたものの一つである。

現在のソ連における中国研究の一つの方向として、毛沢東一派だけが中国革命をやったのではないという立場からの、中国革命史の見直し、あるいは歴史書き替えの試みがあり、その一環として、かつて一九三〇年代前半における中国共産党の指導者で、終始親ソ派の立場を貫き、一昨年モスクワで没した王明のメモワールや、コミンテルンの中国アドバイザーであったオットー・ブラウン(李徳)の手記などが発表されたが、「延安日記」もまたそのような立場から中国革命史を再検討するために出された評判の出版物である。

因みに、王明がソ連でいかに大事に扱われたかは、その立派な墓からもうかがわれる。彼の墓は、モスクワの有名なノヴォデヴィチ修道院墓地の一角にあり、フルシチョフの墓のすぐ近くにある。この墓地に葬られるだけでも大変なことで、昨年ここを訪れたときには、王明の遺影が飾ってあつ

て、それだけで非常に立派な墓だと思ったのだが、今度行ってみると、そのお墓が一層立派になっており、フルシチョフのそれより大きい王明の胸像が聳えていた。これはやはり、ソ連当局が最後までいかに王明を重視していたかを示すものだろうと思う。

ともかく、最近のソ連における中国研究の一つの方向として結論づけられることは、中国革命は必ずしも延安が根拠地ではなかったということである。中国革命の中心としては、延安よりも高崗らの東北を評価し、毛一派によって肅清された彼らこそが、ソ連との協力の下に優れた国際主義の精神を発揮し、最も輝かしい中国革命のモデルを築こうとしていたのだというのが、ソ連なりの新しい中国革命史の見方なのである。

また、こういう立場によれば、何も毛沢東だけが中国農民運動の指導者ではない。毛沢東がつくったという広州の農民運動講習所は、もともと国民党の組織であって、真にコミニズムの立場に立った農民運動の指導者は、同じ広東で一九二七年、海豊・陸豊(県)に海陸豊ソビエトをつくった彭湃——早くして国民党の手で殺されたことになってい——であり、この彭湃こそ中国の革命運動、農民運動の草分けである、という。これはある意味では、現在のソ連共産党の毛沢東主義批判の立場からする中国革命史の書き替えである。

そこで、ウラジミロフの「延安日記」はそういうものの一つであり、ソ連の学者ならこぞって本書を推賞するかと思いきや、意外にも、本書が今日の時点で発表されたことを含めて、政治主義的立場から党がいま進めている一連の中国革命史の書き替えには、学者としてはついて行けない、といった意味での批判が相当多かったのである。

主として東洋学研究所や、社会科学学術情報研究所などにいる学者のこうした考え方は、現在のソ連の中国批判はいささか度を過ぎていっているのか、もう少しともに中国というものを見てもらいたい、といったことで、これは突き詰めていけば、かつてドブチェクを押えつけ、あるいは国内でいまサハロフなどを押えつけているブレジネフ体制に対する批判にもつながるようなモメントをもっているのだと思う。これは私にとって一つの発見であり、驚きであった。

日本の研究・報道に大きな関心

ただ、ソ連ではこのように本格的な中国研究が行なわれているのだが、そこでのもう一つの問題は、現在の中国に関する第一次的な資料や文献については非常に不足しているということだ。たしかに台湾の「中共研究」なども——これはおそらく日本や香港から入手したものだろう——あるにはあるが、せいぜいそのくらいで、われわれが日本に比べると比較的容易に手に入る中国の未公開文献のようなものは——少なくとも学者のレベルでは——ほとんどない。そういうことから、彼らは日本の中国研究の動向に非常に注目している。これまでソ連のあれこれの出版物にしばしば引用されていたので、ある程度想像してはいたが、たとえば私の論文なども数多く翻訳されているし、日本の中国研究に対する彼らの関心ぶりには想像以上のものがあつた。同時に、彼らは日本の新聞報道にも相当な関心をもっている。

日本の新聞報道に対する関心といえは、こんなことがあつた。周知のように、さきごろ「サンケイ新聞」が「周恩来の遺書」なるものを伝えたことがある。これはおそらく、香港のある種のイェロー・ペーパーの類いからとつたもので、伝える側でも、あまり生真面目にこれを本物視して取り上げたのではないと思う。ところが、それをタス通信の東京特派員が全面的に書きかえ、非常にシロッキングな内容で流したわけである。そこでソ連では、「サンケイ」紙が伝えた「周恩来遺書」が非常に大きな話題になっていった。私はソ連滞在の最後の一日半、休暇をとって、エストニア共和国の首都タリンに保養に出かけたのだが、何とそこのタリンの科学アカデミーの人たちが開口一番、「サンケイ紙によれば……」云々というのである。

エストニア共和国は例のバルト三国の中の一つだが、タリンあたりになると、日本人は誰もいないし、中国のカゲなど全くない。そしてソ連にもこんなところがあるのかと思うほど素晴らしい、西欧化したところである。むしろ民族的にも、エストニア人はロシア人とは全く違う。彼らは、西欧化していることが進歩のメルクマールでもあるかように、誇らしげにそれを語っている。たしかにエストニアは、生活水準もソ連の中にあつては非常に高く、実に住みよいところである。

ところが、そのように日本からも中国からもいろいろな意味で遠く離れたエストニアの首都で、それほどまでに日本の一新聞の記事が注目されているのである。彼らもつて来た「民族の声」というエストニア語の新聞を見ると、「サンケイ新聞」とその記事のことが大きく出ているので、私は非常にびっくりしたわけである。

中ソ間に突然変異はもはやあり得ず

こういった状況で、要するにソ連ではそれほどまでに中国に対する関心が高まっており、中国研究がますます盛んになってきているわけだ。さて、そういう中で、いったい現在の中国というものをソ連はどう見ているのか。たまたま二五回党大会の時期にも重なったので、私は連日、ソ連の学者、研究者と熱心に意見を交換した。

そこで、いよいよよきよの本題になるわけだが、結論的にいうと、私は今回のモスクワ訪問を通じて、当面の中ソ関係にはもはや突然変異はあり得ない。つまり、ある朝目が覚めてみると中ソが一枚岩の団結を取り戻していた、というようなことはもはやあり得ないという感を非常に深くした。むしろ、外交レベルで中ソ関係が何らかの変化をみることは、周恩来なきあと中国がきわめて流動的であるだけに、十分あり得ると思うが、しかしそれは、日本の安全を脅やかすほどの一枚岩的な再団結ということでは決してあり得ないだろう。少なくともここ当分はそうであり、いかに中ソ対立が深刻な根深さをもつにいたっているかを、私はつくづく再確認したのである。私も日本にあっては、共産圏では何が起るかかわからない、彼らはいついかなる時にどのように態度を豹変するかわからない、それに対する警戒はおさおさ怠ってはならない、というふうに考えるものだが、しかしだからといって、現在の中ソ関係が急激に変えることは、もはやあり得ないように思う。

考えてみれば、中ソが友好であった時代はほんとうに短かった。厳密にはそれは、一九五四年にブルガーニンやフルシチョフが北京を訪れ、五〇年に締結した中ソ友好同盟条約など、いわば両国の不平等関係を是正した時期から、人民公社運動が始まる五八年前半までのわずか数年であって、それ以外の年月を通じていまや両者間には、摩擦や対立の要因があまりにも多く組み込まれ過ぎて

いるような気がする。結論をいえばそういうことだが、ではなぜそのように感じたかということにのべてみたい。

文革派による変則集団指導を予想

私はモスクワで多くの中国研究者と会ったが、その中の一人にカーピッツァという人がいる。彼は現在、ソ連外務省の極東第一部長として、グロムイコ外相のすぐ下で中国政策の立案にあたっている。モスクワの日本大使館筋の話では、彼はソ連外務省の幹部会議のメンバーであり、グロムイコ外相と非常に近く、同時にポリトビュロー（党中央政治局）に密着していて、相当な有望株であり、やがては外務次官から外務大臣をも狙うような人物だという噂もあるそうだ。彼はもともと中ソ関係の専門家であり、日本でも彼の「中ソ関係史」などが翻訳出版されている。

そのカーピッツァ氏がある晩、「レストラン・ブラハ」に特別室をしつらえてくれ、そこで三時間以上にわたって——通訳なしに英語で——中ソ関係の諸問題を語り合った。

まず現在の中国について彼らは基本的にどうみているか。この点は私とはかなり意見が違ったようだが、カーピッツァ氏など党・政府に近い人たちは、現在の走資派批判によって鄧小平グループはもはや再起不能に近い大きなダメージを受けている、したがって鄧小平などいわゆる走資派の力はあまり評価できない、という見方である。そして、基本的にはやはり上海グループの力が非常に強いという。では、鄧小平はなぜダメなのかというと、彼はすでに文革でやられた人物であり、しかも高齢である、また中央政治局の中にあまり基盤をもたない、という。（四月七日、中共中央政治局は鄧小平を政・軍すべての役職から解任し編注）

そして、後継者については、ワンマン・プラス集団指導となるに違いない、文字通りの集団指導は中国ではあり得ない、という。では、そのワンマンはどの辺から出てくるかといえば、鄧小平については「アブソリュートリー」（絶対に）という強い言葉で彼らは否定し、やはり上海グループから出てくるのではないかと、とくに張春橋に注目しているとのことであった。したがって、こういう見方の延長線上に出てくるのは、毛沢東の最終的な決定権はいままなお依然として相当

に強いという見方である。

ソ連パイロットの釈放をめぐる

昨年一月二七日、中国がソ連のヘリコプター乗組員三名を突如釈放し、これが中ソ関係の今後と絡んでいろいろ臆測を呼んだことがある。この出来事は当時、正月番組と重なって日本の新聞ではあまり大きな記事にならなかったが、アメリカでは、たとえば「ニューヨーク・タイムズ」が元旦の社説で取り上げたくらいで、非常に大きな衝撃を与えた。というのも、アメリカの今日のアジア政策は、いわば中ソ対立の永続性を自明のこととし、それを基本前提にして組み立てられているので、これを脅やかすいかなる徴候に対してもきわめてセンシブルにならざるを得ないわけで、そういうことからアメリカは非常に敏感に反応したのである。

周知のように当時、中国はソ連人乗組員を釈放するにあたって、まことに異例の態度を示した。つまり、悪らつな意図にもとづく国境侵犯とか、スパイ云々といった従来の主張を全面的に撤回し、スパイ容疑は完全に晴れた、よって云々と、あたかも自己批判するかの如き声明を発表し、しかも同時に、この三名のヘリコプター乗組員のために宴会を開いてこれを手厚くもてなし、盛大な見送りまでして帰国させているわけである、当時、周恩来氏はすでに死の床にいたわけ、いったい誰がこういう心憎いばかりの演出をしたのか——しかも、一方では「ソ連はファシストである」といった中国側の激しいソ連批判が依然として続いている時期だけに、誰がこのような時期にこういう思い切った決断を下したのか、そしてそこにはどのような狙いがあるのかについて、私も非常に関心をもったわけである。

そこで、これをソ連がどうみるかについてカーピッツァ氏に尋ねてみたのだが、ソ連としてはこれを中ソ和解へのシグナルとはいささかも見えないという。この点は、中国研究者で外交に関係しているもう一人の大御所、ティフヴィンスキー氏の見方も全く同じだった。

ティフヴィンスキー氏は孫文研究で広く知られ、現在、科学アカデミー準会員で、外務省史料調査局長など五つくらいの肩書きをもっているという。カーピッツァ氏もそうだが、ソ連ではこう

いう学者が多く政治的なポストにつくわけで、六年に周恩来とコスイギンが北京空港で会ったときに、ティフヴィンスキー氏は同席している。また、そのときに中ソの国境紛争を交渉のテーブルに乗せる合意ができたわけで、その国境交渉にはこのティフヴィンスキー氏がイリイチョフ代表団の顧問格として加わっている。

そこで、私は彼にも前述の問題について聞いたのだが、彼らが一貫していることは、あの出来事はソ連の立場や政策が全く正しかったことの反映であるという。ソ連はこれまで、赤十字や北京の大使館、その他さまざまな外交チャネルを通じて、あのヘリコプター乗員は誤って中国領土に入ったもので、決してスパイではないということを主張し続けてきた。そのソ連の正しい一貫した態度が今回の事態をもたらしたのだ。ただ、それにも拘らず北京は、不当に長く乗員を抑留した上、釈放にあたってはさまざまな政治的演技をもつてこれを自分のために利用した。これはまさに西側諸国に対する彼ら一流のプロパガンダである——このようにティフヴィンスキー氏はいいい、そして彼は、非常に温厚な人なのだが、コプシをふり上げて激しい怒りを示したのである。

因みに、今年に入ってからソ連も二人の中国人「捕虜」を釈放しているが、カーピッツァ氏によると、これは中国側の措置に対応した、いわば相互主義にもとづく措置に過ぎない。これは決して、両者の関係をめぐる彼らのシグナルではないわけだ。アメリカは非常に敏感に反応したが、当のソ連は全くそのようにはみていないということである。

外交的成功を背景に強硬姿勢維持

したがって、ソ連は全般的には中国に対して非常に強気で、とくにここへ来て走資派批判が湧き上がっているだけに、やはりいままでのソ連の政策を改める必要は全くないし、しかも当面は文革派が出てくると彼らはみているので、むしろいままでより以上に強い立場で中国に対応していくことが必要だとしているようだ。そしてそのことによって、来たるべき将来には、すなわち毛沢東なきあとやがて、ソ連はすべての点で勝利するのだ、という一つの展望を抱いているような気がする。

たしかにソ連は、このところあちこちで大いに成功している。エジプトだけは最近における重要な失敗の例だが、それ以外では、われわれとしていささか憂鬱なほどに、ソ連の外交政策はあちこちで成功を収めている。

たとえばインドシナ半島では、南北ベトナムはもとより、ラオスでさえソ連の影響力が非常に強い。つい先日、カイソン首相は北京で、自分たちは中国派ではないといわんばかりのスピーチをしている。ハノイは今日、完全にソ連のほうを向いている。彼らが本心からソ連を信じているかどうかは別問題だが、中ソの厳しい対立の中でどちらを選択するかといえば、明らかにモスクワを向いていることはいうまでもなからう。

ソ連の人々が次にいうのは、アンゴラにおける中国の敗北とソ連の勝利である。これもまさに彼らのいう通りだろう。もう一つは、六〇年代に中国があれだけ力を入れ、アジア・アフリカ民族解放闘争の一つのモデルとして考えていたキューバだ。当時、中国はフルシチョフを激しく攻撃し、キューバとカストロを盛んにたたえているが、そのカストロがいまでは大変なソ連びいきで、少なくとも国際政治の上ではもはやソ連一辺倒と思われる状況である。

このように、ソ連は次々に成功し、中国は次々に失敗していると彼らがみている情勢を背景に、ソ連は非常に強気になっている。そして、中国は内政的に今後大いに流動するであろう、しかも当面、その中国のリーダーシップは、ある意味の合理主義者や現実主義者ではなく、いわゆる毛沢東グループ、文革派が握るのではないかとみて、これに対しては非常に強い姿勢で対応しなければならぬとソ連は考えているようだ。したがって、ソ連は今後の中ソ関係については、いまの政策を続けながら、いわばウェイト・アンド・シーの態度をとっていかうというふうだ。

中ソ条約—中国の出口を見守る

私はカーピッツァ氏に、中ソ友好同盟条約を一体、どうするつもりかと質問してみた。同条約は周知のように、一九五〇年、中ソ一枚岩のシンボルとして締結されたもので、まさにこれができたがゆえにその後、朝鮮戦争を経て、サンフランシスコ日米体制が生まれたわけだが、これは四年後の

一九八〇年に期限が満了する。周恩来はかつて、中ソ友好同盟条約はすでに死文化した、とのべたが、私は同条約について、とくに日中平和友好条約締結の問題に関連して、これがどうなっていくかを日本としてやはり見極めておく必要がある、という立場を表明していたので、この際ぜひソ連側の見解を聞いておきたいと思つたわけである。

カーピッツァ氏によると、同条約は三〇年も前に結んだものであるから、その後の情勢変化に見合った内容の改正があり得る、という。これはつまり、日本の軍国主義復活とか、ソ連や中国に対する再侵略といったことを想定し、日本を仮想敵国にしていた当時の状況は、いまではすっかり変わってきているということを、彼らは認識しているということだ。そこで内容の改正はあり得るというわけだが、内容の改正にしろ、あるいは廃棄にしろ、その場合には期限満了の一年前に両締約国のいづれかが、そのことを相手側に通告しなければならぬ。とすれば、遅くとも七九年の春、すなわち三年後には、中国なりソ連としてその態度表明を迫られるわけである。

そこで、「私は一研究者として七九年春に非常に注目しているのだが」というと、カーピッツァ氏は笑つてうなづいていた。そして私が、内容の改正があり得るということは、ここ二、三年のうちはこの問題について中国側と交渉しなければならぬはずだが、それを始めるのかと聞くと、彼はいささか返答に困つたらしく、いまは相手側の出口を見ているところだ、という言い方をしていた。

もし二、三年のうちに中国側との交渉がもてず、両者ともに何の手も打てなければ、同条約は自動延長になるが、と問うと、彼は「それは不自然なことだ」とはつきりいった。私はさらに、同条約が八〇年以降も必要だというなら、われわれもその存続を前提として問題を考えなければならぬ、とか、周恩来は死文化云々といっているが、とか、中ソ関係の現状からみて廃棄の可能性もあるのではないかと、などとかなりしつこく問いただしたのだが、それらについては彼はほとんど答えらしい答えをしなかった。ティフヴィンスキー氏その他、中ソ問題について相当な影響力をもつてあろう人々の誰もが、同条約廃棄の可能性については一言も吐かなかつた。

われわれとして、やはりこの点は注目していいだろう。つまり、現在のソ連としては、中国が今後どうなるか、非常に流動的でわからない。まさにソ連も、中国の出方次第で両国間のこういった問題を考えようと思っているわけだから、毛沢東もそう長くはあるまいということを含めて、ここ二、三年に大いに注目しているわけで、われわれとしては、たとえば日中友好条約をどうするかといった場合にも、その辺のことを十分考えた上でわれわれの選択をする必要があるのではないかと思う。

中国政策はどこで決まるか

中ソ問題の最高権威の一人であるカーピッツァ氏も、おそらく対中関係では相当な発言権なり決定権をもっているのだろう、と思いつながら私は、いったいソ連の中国政策はどこでどのようにして決まるのかという質問もしてみた。なぜこんな質問をしたかというと、実は私がモスクワに着いたのは二月八日の夕方であった。ところが、その前の晩に、華国鋒の首相代行就任のニュースが流れ、二月八日の日本の朝刊にはすでにそのことが出ていて、私はその朝刊を読みながらモスクワに行ったわけだが、モスクワのシレメーチボ空港に出迎えてくれた前述のクザジャン氏やデリューシン氏は、一緒に自動車に乗り込むとすぐ、華国鋒の問題をどう思うか、と私に聞くのである。たぶん妥協の産物だろう、というようなことを私はいったのだが、あとで日本人記者や日本大使館の人などから聞いたところでは、その日のソ連紙にはまだ華国鋒のニュースは一切流れていなかったという。しかも、その日は日曜日だった。そして、翌九日になって初めて、「ニューヨーク・タイムス」の報道としてこれがソ連紙に出ているのである。だから、日曜日でもあり、普通のソ連人だこのニュースはまだ知らないはずなのに、科学アカデミーの専門家であり、同時に政府部内でもかなりの地位にいる人のところには、やはりちゃんとこういったニュースが流されているのだということとをあとで発見して、これはさすがだなと私は思ったわけだ。

そういうこともあったし、たしかにソ連では、中国の現状に関する第一次的な資料なり情報については隔靴搔痒の感があるが、しかしソ連はさま

ざまの情報・宣伝機関など、あらゆるチャネルから中国情報を集めているはずで、これは私の研究テーマとしても非常に興味ぶかいところなので、カーピッツァ氏に前述のような質問をしたわけである。

すると彼曰く、われわれは西側諸国とは違う、基本的にはポルトビュロー(党政伯局)が決める、と。ただし、ソ連外務省はいくつかの政策を立案し、それを提案する、そしてその提案の大部分は採用される、しばしば上から指令がくることもある、ともいっていた。だから、いくつかのチャネルがあると思うが、しかし具体的な政策についてはかなりの部分、外務省の極東第一部あたりが煮詰めて、それを上に提出するのだろうという気がした。

いまの政治局の中では誰が中国に詳しいのか、と聞くと、ちよっと返答に困っていたが、ややあつて彼は、ブレジネフ、コスイギン、それにスープロフ、グロムイコと、この順序で名前をあげ、この人々はみな中国問題に詳しい、といっていた。私はソ連問題の専門家ではないので、今回の党大会そのものについての解説はあまりできないが、彼の話しぶりからしても、中ソ対立がこれほど深刻な今日、党内きつての理論家として、とくに中国関係で重きをなしていたスープロフは、西側における一部の見方とは逆に、依然としてかなりの力をもっているのではないかと感じた。

中ソ対立に絡む北方領土問題

ところで、私は北方領土の問題にもふれてみた。「日本は中ソ対立の波にもまれ、揺さぶられている。しかし日本人の一般的な感情としては、ソ連が何をいおうと、北方領土問題を解決してくれない限り、ソ連のいうことに共鳴できず、同情的になれない。このように中ソが競合している状況において、もしもソ連がいま北方領土返還を実現するならば、これはソ連にとって失うものより得るものの方がはるかに大きいはずだ」というと、カーピッツァ氏のような専門家、学者にはこの理屈が、わかつてはいるのである。ところが結局は、「中嶋先生はいづから外交官になりましたか」などと喋ってはぐらかしてしまうので、私もそれ以上は「追及」できなかった。

ただ、そのときに彼はこんなことをいった。中

国がいま北方領土のことをとり上げ、盛んにソ連を非難しているが、目下の状況ではわれわれはそのことを意識せざるを得ないのだ、と。こういう意味のことは、ソ連の他の学者もいつていた。周知のように、中国のいまのソ連批判の中には必ず、「見よ、ソ連社会帝国主義は北方領土を返せという日本人の正しい要求をどのように頑なに拒否しているではないか。これこそソ連の覇権主義だ」という文句が出てくるわけだが、今日のような状況の中でそれが出てくるものだから、ソ連の学者の中にはある程度、日本の要求に正当性を認める空気があったとしても、ソ連としては中ソ対立が現状のまま進む限りテコでも動かない、といったところがあるわけだ。

そんなわけで私は、中国は中国なりの論理でそれをいうのだろうが、日本としては、北方領土問題では中国が黙っていてくれたほうがいいと思うし、したがって日中関係の中でも、この問題については中国はあまりいわないでほしい、くらいのことを日本政府もいべきではないかと、そんなことを感じた次第である。いずれにしても、北方領土の問題は中ソ対立、およびそこの懸案たる領土問題との絡みであるという印象を、私は非常に強くもった。

低下した台湾のウェイト

最後に、台湾および韓国の問題についてちょっとのべてみたい。私は今回の訪ソにあたっては、いったいソ連にとって台湾や韓国はどれほどの意味をもっているのかを私なりにつかむことに、一つの大きな興味をもっていた。それはいうまでもなく、日本にとって台湾や韓国は大きな意味をもつからである。

ところが、まず台湾については、カーピッツァ氏のほかに、国民党についてくわしい専門家にもかなり会って議論したのだが、台湾の将来——たとえば台湾の独立問題をどう思うか、あるいは、かつて長くソ連にいて、ロシア婦人を妻とし、いまは反共であれかつてはコミンテルンとつながりのあった蔣経国について、ソ連はどう思っているか、こういったことは私にとっても非常に興味のあるところだったが、結論的にいうと、現在のソ連にとって台湾のウェイトは非常に小さくなったというところである。

というのは、やはり中ソ対立をソ連の側から全面的かつ修復不能の最悪事態に追い込みたくないし、とくに今日、中国の内部が非常に流動的になって、今後どうなるかわからないという状況があるだけに、その巨大なわからなさ、不可測性というものはある意味で、ソ連にとっては「あわよくば……」の期待を抱き得るものであるから、そのことを犠牲にしてまで台湾に手を出したり、これと結びつくようなことは考えない、ということではなからうか。

「台湾の独立はあり得るか」という質問に対して、たとえばカーピッツァ氏は「五年前ならその可能性があったのではないか。五年前にはその問題はきわめて重要な問題であった」と、非常に含みのあることをいつていた。五年前といえば、例のピクター・ルイスなる英語名のソ連の「通信員」がひそかに台湾を訪問し、ソ連と台湾との間に微妙な動きがみられた時期であり、そのような経緯を思い浮かべながら聞くと、カーピッツァ氏の発言にはいささか意味があるような気がした。

いずれにしても、台湾の将来については結局はセルフ・デタミネーション（自決）が望ましい、しかし現在のところ、ソ連として蔣経国と接触するようなことは全く考えていない、といったニュアンスのことを彼らはのべていたように思う。

同じことは韓国についてもいえるようだ。韓国には現在、中ソいづれかに接触を求めるような動きがみられる。私を招いてくれた前述の研究所に行くとき、保健図書の中に「韓国文化年鑑」というのがあり、それを一生懸命に読んでいる若い女性があった。これは最近、韓国がソ連、東欧との接触の第一歩として、学術書などの交換を行ない、そういう書物を寄贈しているわけだ、それがそういう研究所にいつているのである。しかし、そういう動きはあるものの、どうやらこれは韓国側の「片思い」の感が強く、現在のソ連にとってはやはり、アジアの社会主義政権とそこの問題が高い優先順位を占めているのではないかと思われ

文革派側にもしろ焦りが

ついでにいえば、日中関係について現在彼らが最も大きな関心をもっているのは、日本は中国からほんとうに石油を買うつもりなのかという問題

である。私は専門家ではないので、彼らの質問にはごく限られた返答しかできなかったが、彼らはこの問題に大きな関心を持ち、たとえば稲山ミッシェンの訪中を引合いに出したり、中国産の石油は質的に日本の製油装置に合わないはずだが、などといった、日本の中国石油大量買付けにかなりの懸念を示していた。ということは、この問題に關しては一方にチュメニ開発の問題があるわけでも、もちろんソ連としては、日本がもつとチュメニに積極的になり、中国の石油はできるだけ買わないでほしい、という気持をもっているのだと思う。

なお、中国における走資派批判の問題について、ちよつと私の感じをいうと、ソ連側のいうように、文革派、上海グループが強いというのは、現在のところはたしかにその通りだが、しかし私は、もう少し長期的にみると、いわゆる鄧小平グループというのは意外に強いのではないかと思う。というのは、彼らの主張のほうが中国の将来により適するのではないかという意味で、時は彼らを利するとみられるからだ。

大学のキャンパスとか、「人民日報」などのマス・メディア、それに地域的には、かつて雷鋒という人民英雄を生み出した瀋陽軍区とか、「農業は大寨に学べ」の大寨、「工業は大慶に学べ」の大慶油田地帯など、いわば文革派にとつてのモデル地区、あるいはモデル部隊でこそ、そういう走資派批判なるものが一斉に湧き上がったが、どうもその動きは全国的、あるいは全社会的ではないし、とくに今回の場合、軍部内にそれが広く波及していく様子がみられない。したがって、文革派の力は圧倒的なようにみえて、実はそうではないように思える。毛沢東健在にしてなおそうであつてみれば、文革派としては、毛亡きあとへの不安

をいま非常に強くしているのではなからうか。たとえば、いま批判にさらされていると思われる葉劍英なども含めて、鄧小平のほうが文革派の人々よりはるかに長い軍歴、あるいは軍政治委員としてのキャリアをもっているし、ここ一年ばかり、むしろ鄧小平系統の軍人がかなり台頭してきている。現在、いわゆる近代化路線、経済路線なるものが批判されているわけだが、これらの軍人をしてこういった批判に同調させることは、かなり難しいのではなからうか。

これは過日もNHKテレビでのべたのだが、周恩来の葬儀に際しては、鄧小平がこれを司どると、最後に弔辞を読んだ。しかも彼の弔辞は、中国革命の事績を回顧し、いわば彼の立場から世紀の宰相を悼み、見送るものであった。これは文革派にとっては何を感じさせるものであったか。冠婚葬祭、とくに葬儀について格別の意味を感じる中国人の意識からして、もしも毛主席が天寿を全うしたときには、またもやあの悔い改めない走資派、しぶとく復活した実権派が毛主席の弔辞を読み、これを送るようになるのではないか——このように彼らは感じたのではなからうか。

こうみていくと、表向きは華やかだが、むしろ潜在的には文革派のほうにかなりの焦りの意識があるのではないか。だからこそ、内外に問題山積する今日、こんなことをするのはロスが多いと思われるのに、彼らはなりふり構わず走資派批判に狂奔するのではないか。これが現時点での私の見方である。つまり、状況はまだまだ流動的で、このさきどうなるかわからないわけで、一部の新聞論調は「これでもう鄧小平はおしまいだ」というのだが、私はどうもそうではないような気がするわけである。

質 疑 応 答

——中国はかねて、いづれ第三次

世界大戦が起こり、ソ連が中国に攻め込んでくるといっているが、こうした中国の見方をソ連はどう考えているか。

中嶋 それこそまさに中国の言いがかりであつて、自分達が世界戦争を画策しているなどということは全

くない。その証拠に、われわれの平和デタント外交を見てくれ、というのがソ連の言い分です。

——今回の走資派批判も、文革から一〇年という時間の経過を見逃がしては考えられない。文革派の力の自信がその背景にあると思うが、どうか。

中嶋 ソ連の走資派批判に対する見方は、ただいまのご指摘に非常

に近いように思いました。ソ連は当面、文革派がかなり力をつけてきていると見ているようですね。

——最近の「プラウダ」が姚文元を批判して、「バカどもがいる」と言っているが、中国の民衆はソ連に非常に愛情を持っている。いまに見ている、必ず中国の民衆は起ち上がつてあの連中を打倒するだろう」といって

る。中国内部の親ソ派に対するソ連の自信はかなり強いようだが、この点についてどういう印象を持ったか。

中嶋 さきほど、高崗、王明(陳紹禹)などの親ソ派指導者に対するソ連の評価についてのべましたが、中国共産党内部の親ソ派をソ連がいりろ考えているのは事実のようですね。しかしこれは、党内鬭争の敗北者をソ連が結果的に評価するということでして、現在の中国共産党の中におっしゃるような形で親ソ派がかなり存在しているかどうかは、私はちょっと別問題だと思います。

したがって、たとえば鄧小平も、もし失脚すればソ連のいう親ソ派ということになるのでしょうか、しかし、ソ連も果たしていま、そこまで拠点を持っているかという点、どうもそれはちょっとソ連の強がりではないかという気がします。ただ、ソ連にいわせると、周恩来も毛沢東の犠牲者だったし、劉少奇もそうだったとして、周恩来などをかなり高く評価していますね。

ですから、毛沢東が先に亡くなつて周恩来の時代がきたら、われわれはもっと違った政策をとれたのにという、いわば無念さを彼らは感じているようですが、だからといって、毛沢東グループとの対立の中の周恩来なり鄧小平、あるいは劉少奇なりが必ずしも親ソ派だとはいえないわけです。かつての王明のような指導者がいま中国の中にいるかという点、どうもそうではないような感じがします。

しかし、ちょっと気になったのは、東洋学研究所のユリエフという有名な中国人の研究者のところには、いつも中国から情報、資料のたぐいがかなりきているということ聞きましました。ですから、何らかの形の接触はあるのではないかと思います。現在の党政治局の中かなり明らかに姿でソ連派の拠点があるかどうか

は、私は疑わしいと考えます。

——中国とソ連の乖離の根本原因についてはまだ十分に解明されているとはいいたいが、この問題をどう考えているか。

中嶋 短時間でお答えするには非常に難しい問題ですけれども、たしかに、ご指摘のように中ソ対立の根本原因は十分に解明されていないと思います。

私は、この問題を四つのレベルで考えています。一つは、いわば漢民族とロシア民族との、ネルチンスク条約以来の根深い対立でしょう。ユーラシア大陸に巨大な二つの民族が存在すること自体が持つ摩擦、しかもその間にモンゴル民族の居住空間という広大な中間地帯があり、これをめぐる歴史的な角逐や興亡がブラズされて、抜き難い民族的な軋轢みたいなものがあります。

片や、レーニン、スターリンの時代になってロシアが革命国家となり、一つの強い国家意識が出てきますし、中国のほうも辛亥革命を経て延安時代にいたる間に、統一国家意識が高まって、単なる民族的対立以上に、スターリンのソ連に対する対抗意識が出てきたような気がします。こうして、ある種の国家的対立感情が芽生える。

三番目には、党と党との対立です。これはいわゆるイデオロギー論争からくるわけでして、しかもいわば異教徒的対立であるよりは、同一教義の中で互いに正統性を主張し合つて相手を異端者呼ばわりするといふ非常に深刻な対立です。

四番目に、それによつてもたらされる政府間の対立だろうと思えます。よく新聞などで、中ソの国家関係が改善されるかどうか取り上げられますが、これはこの四番目のレベルにおいてのことです。

今後、たとえば中国もリーダーシップが変ればどうなるかわかりませんが、あるいは非毛沢東的なリーダー

シップが出てくれば関係改善の可能性があるのではないかと思います。それが証拠に、ソ連のリーダーシップが変るたびに周恩来がモスクワに飛ぶというようなこともあったわけです。

ただ、今日ではこの四つのレベルの中ソ対立がまさに渾然一体となっているわけで、そこに今日の中ソ対立の意味と根の深さがあるわけですね。したがって、もし今後、仮に走資派的なものがリーダーシップを握り、ソ連との友好関係を回復したとしても、それはあくまで政府間、あるいはせいぜい党レベルであつて、必ずまた何かの問題でぶつかり、この対立がフィードバックするような気がします。

そう申し上げるのは、東北、つまり旧満州をめぐる中ソ間の利権の問題があるからです。これは旅順、大連の問題とか、戦後ソ連が、日本が旧満州に残してきた資産をほとんど洗いざらい持って行ってしまったことのみならず、非常にいろんなことがあつて、それが大きく絡んでいるような気がします。

そこへもつてきて、朝鮮戦争があります。これもまだ十分に解明されているとはいいたいが、この戦争をめぐる中ソ対立、いつてみればスターリンの戦略に巻き込まれてしまった中国の苛立ちがあり、これらの問題を含めて、むしろいわゆる友好時代の中により多くの材料が隠されているとみられます。それが五六年の第二〇回党大会をめぐるいろんな意見の違いになり、安全保障上の問題、とりわけ核問題で対立が決定的になつて、五八年、五九年段階で二進も三進もいなくなつてしまつた。その辺は、私も研究者が今後、十分検討してみなければいけない課題だと考えています。

新国策

発行所

財団法人 国策研究会

昭和八年創立

□ソ連から見た中国……………中嶋嶺雄

—中ソ和解はあり得るか—

□春季賃上げの合理的配分方法……………佐々木力



	鉱工業生産		鉱工業在庫率		百貨店販売額		国際収支 (百万ドル)			企業倒産状況		労働争議		有効求人倍率		卸売物価		消費者物価 (東京都区部)	
	45年=100	前年同期比(%)	45年=100	前年同期比(%)	輸出	輸入	輸出	輸入	総合収支	総件数	1件当り負債額(百万円)	総件数	損失日数(十日)	季節調整値(倍)	45年=100	前年同期比(%)	45年=100	前年同期比(%)	
40年度	48.6	3.8	52.4	10.1	694	536			405	6,141	92	3,051	5,669	0.61	89.8	0.7	76.7	7.3	
45年度	100	13.8	100	20.4	1,580	1,251	1,374	9,765	75	4,551	3,915	1.35	100.0	3.6	100.0	3.6	100.0	7.2	
47年度	114.6	10.6	100.7	19.0	2,453	1,759	2,964	6,900	69	5,808	5,147	1.30	102.3	3.2	113.5	5.6			
48年度	129.3	13.5	89.9	25.6	3,246	3,179	Δ13,404	9,348	97	9,459	4,604	1.74	125.4	22.6	130.9	15.3			
49年度	117.2	Δ 9.4	136.4	18.9	4,779	4,438	Δ3,396	11,736	145	10,462	9,663	0.98	154.8	23.4	158.0	20.7			
49・10—12	117.4	Δ 13.0	139.5	16.4	5,407	4,500	964	3,411	136	4,243	1,265	0.84	157.0	23.4	162.0	23.8			
50・1—3	102.8	Δ 19.4	161.3	16.1	4,320	4,050	Δ 690	2,772	130	1,030	168	0.72	156.1	7.0	164.4	14.9			
4—6	108.9	Δ 14.0	140.7	12.2	4,481	4,107	Δ1,085	2,772	117	6,230	4,139	0.65	155.8	5.0	171.6	14.2			
7—9	112.4	Δ 8.0	137.0	7.7	4,494	4,007	Δ 315	2,964	221	1,582	303	0.55	156.7	1.0	172.5	11.0			
50・3	109.9	Δ 18.5	140.4	16.5	4,987	4,198	298	1,023	134	628	112	0.71	155.6	4.9	165.7	14.0			
4	107.5	Δ 14.9	140.0	13.9	4,739	4,094	Δ 412	929	115	1,764	1,615	0.73	155.9	4.3	169.8	13.4			
5	106.6	Δ 15.4	143.5	12.1	4,304	4,323	Δ 391	966	111	3,328	2,291	0.64	155.9	3.7	171.6	14.5			
6	112.7	Δ 11.2	138.0	10.7	4,400	3,905	Δ 282	889	124	1,138	233	0.58	155.7	2.2	171.6	13.7			
7	114.5	Δ 10.0	132.9	9.1	4,704	4,170	57	947	140	762	129	0.56	155.9	1.2	171.9	11.8			
8	106.3	Δ 7.6	146.3	10.2	4,325	3,809	Δ 268	977	277	294	r 42	0.55	156.8	0.7	171.2	10.6			
9	116.3	Δ 6.1	132.8	3.7	4,454	4,042	Δ 104	1,039	245	526	r 132	0.55	157.3	1.0	174.5	10.7			
10	116.0	Δ 3.7	134.7	10.1	4,757	4,410	Δ 798	1,278	106	614	94	0.53	157.9	0.8	177.6	10.1			
11	113.4	Δ 2.7	141.2	8.9	4,310	3,876	Δ 401	1,317	187			0.52	158.3	0.8	176.4	8.8			
12		1.5	126.4	7.1	5,797	4,675	613	1,493	128			0.53	159.2	1.1	176.1	8.6			
51・1		7.8	156.1	8.4	3,577	4,131	Δ1,059	1,075	124			0.58	160.5	2.4	180.0	10.2			
2							630	1,089	158				161.6	3.7	181.5	10.7			

[資料出所] 労働争議の項は「労働省労働争議統計」、有効求人倍率は「同職業安定業務統計」より。他は経済企画庁統計より。
[注] 労働争議の項、年平均値欄は年間の合計。2カ月以上にわたる争議については重複して現われるため、月別の数字の和は年平均値欄と一致しない。

[注] 労働争議の項、年平均値欄は年間の合計。